鳥取の民話

52

収録・解説　酒井董美（ただよし）

語り手　大原寿美子さん（明治40年生まれ）
昭和62年8月22日収録

多根の藤助

（八頭郡智頭町波多）

助けた狼の恩返し

あらすじ

昔、倉吉のそばの多根に藤助いう度胸のすわった男がいた。倉吉から晩遅く帰っていたら、狼（おおかみ）が藤助にすりよって、大きな口を開けるから、見たら骨が喉につまっておる。喉に手を入れ取ってやった。狼が頭を何回も下げ逃げてしまった。

藤助がもどってみると、娘さんが「今夜泊めてつかあさい」と言う。泊めてやったら、娘はご飯を煮てちゃんとし、「嫁にしてつかあさい」と言うので嫁にした。毎日よく働くから、藤助も楽しく過ぎて行った。

ある晩。「藤助さん家のねえさん、用がある」言うので、出ところ、狼の連れがいっぱい来て「そこの松の木のエボに六部が泊まっておる。今日は餌へありついたと思い、つげ狼を次い次いするけど、一人足らん、行ってごされんか。六部の脚を引っ張って落とえたらえええけえ」と言った。

藤助の嫁さんは「すぐもどるけえ。暇つかあさいや」と出て行った。

時間がたったら、もどってきて「わしゃあ藤助さんに助けられた喉の骨を取ってもろうた狼じゃ、恩になったけえ、藤助さんに金もうけさせようと、人間に化けて手伝いをしょう思うたけど、見破られたらしかたがねえ、別れをせにゃあならんじゃ」と言った。

藤助は「田植えをする今になって、いんでごしたら困るなあ」と言ったら、「その方は心配ない。田んぼをすいて苗配っとかれたら、連れがみな来て、田は植えてあげる」と言う。

それから藤助が田のすき取りをして苗を配っておいた。十五日の夜になった。

多根の藤助の
この田の稲は
穂にはならず
水ばらみ

と言う声がする。「穂にはならず水ばらみて、変なケチな歌ぁうたうなぁ」と思ったけれど、夜が明けて朝になって出てみれば、大きな田がきれいに植えてある。

そうしていたら、よその家の稲は全部穂を出すのに、藤助さんの稲はちっとも穂を出さずに、背は伸びるばかりだった。

それから稲を刈って、臼（うす）に入れて挽いてみたところ、その藁（わら）がみんな米になって、いつもの年より5倍も米ができた。

藤助さんはもいい暮らしをしたそうな。獣でも恩返しをしたのだそうな。

そればっちり。

イラスト・福本隆男

解説

関敬吾博士の『日本昔話大成』で見れば本格昔話の「動物報恩」で「狼報恩」があるが、田植えなどの後半部分はないので、この部分はこの話が発展したものということができる。

また、この話は山陰地方には比較的あちこちで聞くことができるようである。

（元鳥取短期大学教授）

（水曜日に掲載）

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。